

# 北朝隋唐期の貴石印章とその用途

—ソグド人・ササン朝との関係をめぐって—

岩本 篤志

はじめに

北朝～唐初の墓の発掘にともない、副葬品として陰刻丸形の印章型の石を嵌め込んだ指輪が発見されたという報告を目にする機会が多くなってきた。たとえば、山西省太原の徐穎墓から出土した指輪型の印章が2003年10号の『文物』の表紙を飾ったことは記憶に新しいところである。これらは皇帝の璽、臣下が持つ印章といった類とかなり様相を異にしたもので、人物や動物像など所謂西方（中央アジア、西アジア、欧州等）由来とおもわれる図像が貴石（宝石）の印面に刻まれている（以後、貴石印章と総称する）。

一方、北朝隋唐墓から出土したこのような貴金属としてササン朝およびビザンツ硬貨が多量に出土しており、倣製品がつくられていたことや、口の中に入れて埋葬する風習があったことなど〔小谷1988〕、漢人が支配していたとされる場所において、こうした西方由来の硬貨がどのような価値をもったのか、多数の研究成果が蓄積されつつある<sup>(1)</sup>。

出土報告等において、貴石印章も印面図像の西方的要素に重点をおいて分析がこころみられているが、参考資料がかなり狭い範囲にとどまっているため、十分な分析がつくされていないように思われる。そのため、現時点ではこうした西方系の貴石印章は東西文化交流の象徴的な存在のひとつではあっても、北朝～唐初の具体的な社会史的意義をもつ資料とはなりえていない。

しかし、中国国内で発見されたこのような西方系の貴石印章は実はすでに相当数となりつつあり、印面の図像やその用途を一步ふみこんで考える手がかりがそろいつつある。

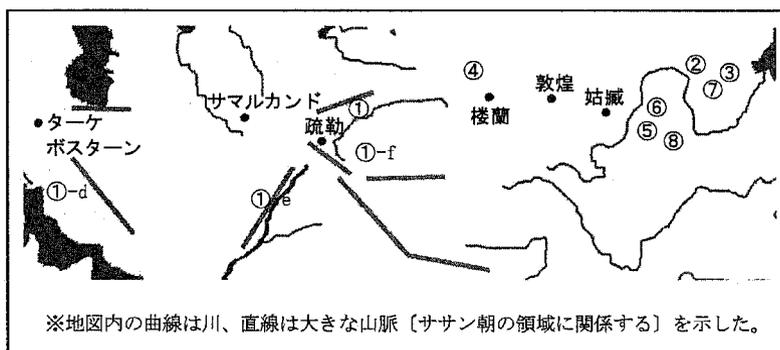
今後、つぎつぎにこのような印章が発見されると予想されるが、1950年以降に発見され、写真が公開されている北朝隋唐期の西方系印章と目されるものを中心にその意義を探る端緒としたい。

## 1. 中国国内で出土・発見された貴石印章

1950年以降に発見され、写真が公表されている貴石印章を、本稿中での名称、出土地、発掘年、印面の材質、出典(画像があるもの)の順で示した。

- ① 巴楚人形押印 新疆・巴楚県・脱庫孜沙来、1959、白瑪瑙  
出典：〔楼蘭展：p.128, 古迹大観：p.266, 黄金の道：p.148〕
- ② 畢克齊金戒指 内モンゴ・呼和浩特近郊畢克齊、1959、黒色寶石?。  
出典：〔呼和浩特, 齊東方 1999：p.410〕
- ③ 李希宗基金戒指 河北・贊皇県南邢郭、1975。  
出典：〔李希宗墓〕
- ④ 高昌人形花押 新疆・吐魯番高昌故城、出土年不明。  
出典：〔古迹大観：p.133〕
- ⑤ 李賢基金戒指 寧夏・固原、1983、onyx? Lazurite?。  
出典：〔李賢夫婦墓, 固原文物：p.129, Juliano & Lerner 2001：p.101〕
- ⑥ 史訶耽墓寶石印章 寧夏・固原、1986、onyx。  
出典：〔羅豊 1996：pp.240～247, 固原文物：p.215, Juliano, A.L. & Lerner, J.A. 2001：p.260〕
- ⑦ 徐穎基金戒指 山西・太原、2002、電気石? ラピスラズリ?  
出典：〔張・常 2003〕

これらと本論中で言及する印章および貴石印章を利用してつくられた李静訓墓出土首飾り(⑧)の発見地を地図上に示すと次のようになる。



この図は近年、陸続と出土品の発見がつづき、注目を集めているソグド人が活躍した範囲にほぼ重なるようにおもわれる<sup>(2)</sup>。もちろん印章出土・発見地だけを

もってソグド人との関係をいうのは乱暴であり、まずは出土地と印章の関係を丹念におつていく必要がある。また 20 世紀初頭の中央アジア探査に際して、北朝隋唐期より古いと考えられる時代のもので西方風の図像が刻まれた印章も多数出土しており<sup>6)</sup>、これらとの時代区分も必要となる。

このような西方系の印章の発見についてよく知られているのはスタインの著書の次のくだりである。1901 年、スタインが尼雅（ニヤ）を調査した際、封印された重ね合わせ型のカロシュティー木簡を多数発見し、封泥にアテネ像やエロス像をみとめ、漢字銘と西方風の肖像の封印が併存する木簡を見つけ、「喜びに満ちた驚き」を書き記している。バクトリアよりはるか東方にかつてギリシア古典文化と中国的文化とが混着していた痕跡を見つけたと考えたからである。そして、以前調査した「古代コートンのみやこあと」ヨートカンの「文化層」から出土した印章とおぼしき彫刻石をひきあいだし、次のようにのべる。

ヨートカンの層の層のなかから見出された同様の造りの彫刻石のばあいにおけるように、これらの封印のどれが実際にコートンの領土内で彫刻されたものか、またどれが西洋あるいは古典芸術が伝わったアジアの他の場所から輸入されたものか、をたしかめることは不可能である。われわれは、かつて封印を使用した人びとの職能や住居をなお研究する必要があるけれども、封印を押した文書がこの古代遺跡の近くか、またはコートン王国の国境内で創始されたものであることに疑念の余地はあるまい。またこの文書の年代も、後述のごとく、かなり正確に定めうるのであるから、われわれにとってこれらの封泥はもし機会に恵まれて印の原物を得たとしても、それよりもはるかに価値の高いものである。〔スタイン、松田訳、2002：pp.199～200〕。

スタインはここで印章そのものより、文書内容の分析によって使用年代の推測ができる可能性を持つ封印のついた木簡の発見に高い価値を認めている。実際にカロシュティー木簡は 3～4 世紀のものであることが解明されてきており<sup>6)</sup>、スタインが発見した木簡の封印につかわれた印章は本稿の対象とした時代とは異なることになる。

ただ、近年、時代特定が困難な地層からでなく、被葬者がいつ埋葬されたかがあきらかな北朝隋唐墓からスタインがみつけたような西方由来とおぼしき印章が出土しており、また中国も、中国以外の地域も考古調査の成果をあげてきている。発見された印章を整理すれば、印章とそれを使用していた人間や社会との関わりがみえてくるように思われるのである。

①～⑧の 8 点のうち、③⑦の 2 顆はいわゆる中原の地にふくまれる河北省、山西省から出土しており、当時の中国の政権およびその社会と文化との関係を考え

ると論ずるべき点が多く、本稿で扱うには紙幅が足りない。また②③④は写真も小さく情報が少ないため、本稿ではまずは写真と情報がある程度提供されている①⑤⑥を中心に扱うものとした。

## 2. 巴楚人形押印の考察

巴楚人形押印 ① 新疆・巴楚県・脱庫孜沙来, 1959年出土



高 2.7×幅 2.2×1.7cm。

印泥におした状態をイメージ作成

〔楼蘭展：p.128〕

①の印は「南北朝時期」「5～6世紀」の「人形押印」と呼ばれており、次のようなA、Bの説明がなされてきた。

- A. 白色瑪瑙の押印。印上の人物は、深目高鼻のコーカソイド種の特徴を有し、頭は長髪で幅広の円頂帽をかぶっている。足には、長靴（ブーツ）をはき、腰にはまえかけらしきものを着け、肩の上に魚などのかついで前を向いて歩いている。メソポタミアの印章と見られる。〔楼蘭展：p.177〕
- B. 白い玉から作った印章で、帽子を被り、荷を背負い、何かを持って歩いている人物を表している。荷物を運送する人物のようであり、あるいは輸送の際の封印に用いたものとも想像される。印の側面には穴が穿たれており、その両脇には楕円形の浮彫装飾がある。こうした形の印章は、ササン朝ペルシアで用いられており、この印もササン朝ペルシアとなんらかのつながりを持つ人物が使用したものであろう〔黄金の道：p.148〕。

若干の違いはあるが、荷物（魚？）を背負い、何かを持って歩いている人物とする点で共通する。大きな相違点は前者がメソポタミアのものとするのに対し、後者は白瑪瑙で、側面に穴が穿たれ、浮き彫り装飾があるという外面的特徴から、ササン朝ペルシアの印章との類似を指摘し、荷物を背負ったような図像から、輸送物の封印とすることである。ちなみにこの印章は現在でも「人形押印」の名称で紹介されている〔張平 2004〕。

この指輪印章の出土状況の詳細は不明だが、発見されたのは脱庫孜沙来（トックズサライ）とされる。トックズサライは天山南路沿道のアクスとカシュガルの間、新疆ウイグル自治区・巴楚県の東北、図木舒克（トゥムシュク）付近に位置する。トゥムシュク帯はペリオやヘディンらが調査した場所である。

中国による発掘は1928年の黄文弼指揮によるものと1959年の李遇春指揮によるものがあり<sup>6)</sup>、図録に1959年出土と公表されていることから推定すれば、①は後者の調査で発見されたと思われる。この一帯からは他にパフレヴィイ、トカラ、ウイグル、サカ、アラビア、漢文等の各種言語の文書が出土しているようであり、また「八世紀のものと考えられるトゥムシュク語の世俗文書には、ソグド語の月名が使われているものがあるし、ソグド人が証人として登場している文書も」〔吉田1997〕あって、ソグド人が居住していた可能性もある。

残念ながら、中国隊による調査の正式な報告書は出版されていないが、榮新江は欧州隊が収集した資料にもとづく調査や言語学的研究の成果をふまえ、トクズサライ南麓の城址を『新唐書』巻43下・地理志がもとづいた賈贖『道里記』等によって示される龜茲の西境にある「據史徳城」と比定した〔榮1991〕。

①が「南北朝時期」「5～6世紀」の遺物とされているのは、おそらく同じ地層の他の出土遺物による推定であろう。たしかにこの西方系の印章は5～6世紀頃、トクズサライが東西交渉の拠点としてさかえたことを感じさせる。ただ、この印からわかるのはそれだけであろうか。

実はこの印章は「メソポタミア」「ササン朝」のものなどと推測されながら、不思議なことにそれらの印章と比較がおこなわれてこなかった。そこでこれら地域の印章との比較をこころみると、重大なことにきづかされる。

ササン朝の印章をみていくと、実は①の印面のシンボルは比較的良好にみられるものなのである。本稿末に付した印章一覧に載せた①-a～①-dをみていただきたい。ここにみられる図像と①は、三角状の持ち物、背負っているもの、何かをかぶっているような頭の形状など特徴が共通しており、同じ図像を意識して作成したものと断言して良いであろう。そして「肩の上に魚などのかついで」「荷を背負い」というような説明は間違いであり、①の背にみえるのは翼であって、一種の「神（天使）像」とみるべきである。

①-a、①-cは大英博物館所蔵で、解説によればともに材質は玉髓であり、①-aは4～5世紀、①-cは5世紀のものとしてされている。奇妙な三角状の持ち物は「diadem（リボンつきの環。王権のシンボル）」だという。ササン朝の王権神授像にはしばしばこれが描かれる（①-g：アルダシール2世王権神授図）。このシンボルは女性神であるニケ、ビクトリアと同等でありながら、ササン朝における男性神とみる説がある〔Bivar 1969〕。①-bはゲーブルの著書では①-aなどともに「Nike Victoria Putto（ニケ、ビクトリア、天使）」に類別する〔Göbl 1973〕。注目すべきは、ササン朝の王権神授彫刻があるイラン北西部のターケ・ポスターン大洞正面アーチに diadem をもつニケとみられる像があり、これが印章と同じモ

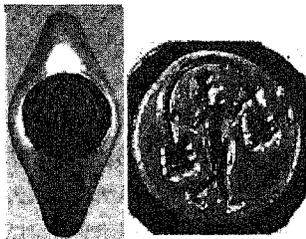
チーフと思われることである(①-h)。田辺勝美によれば大洞正面アーチの像はウァナインティー女神で、その持ち物はフヴァルナー(正統で合法的な王権)をしめすという〔田辺 2002b〕。

①のグループの印章のうち、a,b,cはササン朝の印章とされるも出土地がわからないが、d,e,fはこうした印章には珍しく出土地がほぼ推測可能である。まず、①-dは1930年代のメトロポリタン美術館によるQasr-i Abu Nasrの調査によって得られた印章(封泥)である〔Frye,R 1973〕<sup>(6)</sup>。そして①-eはベシヤワール博物館所蔵であり〔Callieri 1997〕、パキスタン国内で発見されたものであろう。①-fはヘディンが1896年にヨートカンで入手したものである〔Osten 1952〕。

この印章は先の解説にみたように、シンボルとして何を示したのかを知らないものにはその意味を持たないもので、発見されたシンボルに特徴が保持されていることは一定の認識があった指標となりうる。そしてこれがあるていどの分布で見つかることは発見された地域間にこのシンボルについて同じ理解を示す人間がいた可能性が高いことを示している。しかもこのシンボルは王権の正統性を示す神像であった可能性があり、持ち主はある程度の立場の者であったようにも思われる。こうした印章は護符として所持されたこともあっただろうが、実際、出土遺物から封泥に捺されていたことはあきらかだ〔Frye 1973:p.42〕、手紙や荷物の封泥に捺するのが主用途とみられる。

また①は〔黄金の道：p.148〕の写真によれば側面は楕円形で浮彫装飾があり、穴が穿たれている(ヒモなどを通したとおもわれる)。この装飾・形状はビバーのササン朝指輪印章の形状のおおよその年代整理によれば、4世紀から5世紀の典型的なものに一致する。〔Bivar 1969,pp.20-24,p.143 (SHAPES II・AE2/BC3)〕。こうしたことから考えて、このシンボルは少なくともササン朝の領域とヨートカン、トクズサライ間に4世紀から5世紀頃、頻繁に人や封泥を用いた文書や荷物の行き来があった証拠といえるであろう。

### 3. 李賢基金戒指の考察



李賢基金戒指(⑤) 寧夏・固原、1983

最大外径 2.4cm, 石直径 0.8cm

左：〔固原文物：p.129〕

右：印泥におした状態をイメージ作成

⑤は、寧夏回族自治区、固原で1983年に発掘された北周の李賢夫妻の合葬墓から発見さ

れた〔李賢夫婦墓〕。夫婦ともに墓誌が出土しており<sup>7)</sup>、李賢(503～569)は『周書』巻25、『北史』巻59に伝がある。墓誌によると妻呉輝(509～547)は若くして没している。まずは被葬者について紹介し、どのようにしてこのような印章を李氏が手に入れたかを考えてみたい。

李賢の家系は唐室と関係をほのめかすように「その先、隴西成紀の人」とあるが、唐修『周書』は出自を粉飾している可能性があり、墓誌に「李陵の後なり」とあるのは李氏の墓誌にみられる常套である。

曾祖父が北魏太武帝の時に屠各討伐に没して、寧西將軍、隴西郡守をおくられ、祖父の代から原州平高の地に居住したとされる。六鎮の乱がおき、永安年間(528～529)、万俟醜奴が反乱をおこし、爾朱天光が鎮圧するも、万俟氏の殘党が原州におり、鎮王のため、爾朱天光は原州の李賢に助力を求める。ここからはじまって李氏はついには西魏政権の成立にかかわっていく。そして西魏・北周政権のために武功をあげ、墓誌に「故に官爵、四世に隆し、子孫、八凱に茂し」と書かれるまでの権勢をもつにいたるのである。また『周書』本伝によれば、夫人の呉氏は幼少時の宇文邕、憲を6年間養育し、その功で宇文を賜姓され「賜与甚だ厚し」であったといい、宇文氏と近い。

また彼には2人の弟がいた。原州李氏一族の隋代までの繁栄は彼らの働きによるところが大きく、後述するように印章の意味を考える上でも重要である。弟の1人、李遠は『周書』巻25によれば、正光年間(520～525)、北魏政権の混乱に乗じて原州に侵入してきた勅勒をくいじめようとしたが防ぎきれず、兄弟は落ちのび、遠は北魏政権に助力をあおぐために洛陽にむかう。そして先述の爾朱天光の西征に際し、原州で軍を導くと同時に、賢と呼応して功をあげた。

2番目の弟は李穆で『周書』巻30、『北史』巻59に伝がある。宇文泰の腹心であり、永熙3(534)年、秦の敵となった原州刺史の史暉をとらえ、また別に戦地で秦の窮地を救いだすなど武功をあげ、梁元帝をとらえた江陵征討(554)従軍の功績によって、原州刺史に除せられた。その際、李賢の子が平高郡守、李遠の子は平高県令となった。

注目すべきことは、まず原州が勅勒の攻撃を直に受けるような西方との交通の要衝(姑臧と西安を結ぶ交通路上)にあることと、李氏が結果的に北魏政権の助力をひきだしたように華北の安定に欠かせない場所と認識されていたことである。そして西北地域との出入り口というべき場所を李氏が握っていたことは西方系の文物を入手しやすい環境と見ることもできよう。

このような権勢をもつ者の墓にしては李賢夫妻の墓は質素で副葬品も東魏北斉墓ほどの威勢はないが、出土品のひとつにギリシア系とおぼしき西方風の男女が

あらわされた「鍍金銀瓶」がある。典型的なササン朝タイプの金銀に輝く水瓶でこればかりは質素とはいえないが、把手についている人物の頭部の形状などから、ササン朝の影響を受けたトハリストン（バクトリア）で製造されたものとされ、装飾に5世紀以降に作製された特徴をもつという〔マルシャーク・穴沢 1989、固原文物 pp.122～126、Juliano & Lerner 2001〕。また出土品にササン朝のガラスと成分が一致するという「瑠璃椀」があり、正倉院におさめられた瑠璃杯と似た円形突起をもっている〔固原歴史：p.127〕。

黒い貴石印章が嵌め込まれた金の指輪はこのような李賢夫婦墓の副葬品の一点で、呉輝の棺から見つかっており、呉氏が身につけていたと推測されている。印面の図像は簡報では天秤棒を担いだ女性として模写されていたが、実際は上にあげた反転画像のように何か湾曲したのもをもって踊る女性のようにも見える。5世紀のソグディアナから出土した鍍金工芸の一部に同じような踊り子の姿があり、クリーブランド博物館に所蔵される5～7世紀のササン朝の銀皿に、頭上に葡萄の蔓がからまったリボン（スカーフ）をひろげておどる同様な女性像があり、アナーヒタ（ゾロアスター教の豊穡の女神、河神）か、一般的な豊穡の女神と推測されている〔Juliano, & Lerner 2001：p.101〕。またエフタル（5～6C）統治下のアフガニスタンかパキスタンで作製されたとされるエルミターージュ博物館蔵「二人の女性をあらわした八曲長杯」の一方の女性像も同様である〔全集：p.154〕。

以上、いくつも例があげられるように、このシンボルは5～7世紀にソグディアナやエフタル統治下の地域でポピュラーなものであり、ゾロアスター教の神像の可能性もある。ただ⑤が陰刻であって印章としての用途もつことを考えると、このような図像がササン朝の印章にも用いられていたかどうかにはまず留意すべきであろう。本稿末に付した印章一覧に載せた⑤をごらんいただきたい。

⑤とササン朝の印章⑤-aと⑤-bを比較すると、⑤はササン朝の印章そのものか、関係が深いとみられる。ただ、⑤-aと⑤-bは同一の図像と認められるが、⑤は女性のもつ湾曲した部分の両末端の彫りがひろすぎて、天秤棒に桶をつけたように見え、若干相違するようにもおもえる。また、貴石印章として⑤のように金のリングがついているものは、ビバーによる大英博物館蔵のササン朝指輪印章の中にはあまりあげられていない。ただ、〔Frye, R. 1973：Fig33～4、ペルシア展：p.95〕にササン朝の金属製の指輪型印章がみられ、このタイプがササン朝にないわけではないが主流でないようにおもわれる。

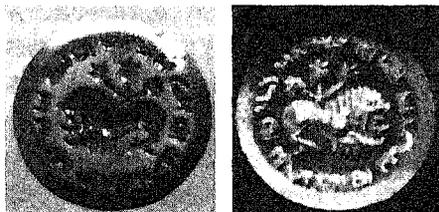
一方、中央アジア出土の絵画類のなかではウズベキスタンのバラリク・テペ出土の6～7世紀作と目される「饗宴図」に描かれた人物2名の指に大きな指輪型印章とおぼしきものがある。ただ「エフタル朝の滅亡後、西突厥治下で制作された」

〔全集：p.206〕とされ、どのような民族が描かれているのかはわからない<sup>60</sup>。

また、アレクサンダー東征によるギリシア工匠の移住の影響か、紀元前～3世紀にかけてバクトリアやソグディアナで同様の金のリングがついた貴石印章があったことがしられる〔Uzbekistan I, p.195, バクトリア：fig.196,全集：p.78〕。さらにソグディアナではソグド文字銘がある3世紀頃の貴石印章〔Uzbekistan I, p.166〕や4～6世紀のドーム型〔Uzbekistan II, pp.44～45〕があり、ササン朝の印章と印面や外観が酷似したものがみられる。おそらく商取引上、ソグディアナでもササン朝領域内と同じように印章を使うことは日常的であったのであろう。またタシケントから石の部分を欠いた8世紀頃の銀の指輪が出土している〔Uzbekistan II, p.75〕。このようにみていくと李賢墓金戒指はササン朝のものというよりバクトリアやソグディアナで製作された可能性がある。なお、次にあげる史氏墓の一つからも、石の部分の欠いた指輪が出土している。

#### 4. 史訶耽墓宝石印章の考察

##### 史訶耽墓宝石印章 (⑥) 寧夏・固原、1986



直径 1.56cm 厚さ 0.46cm

左：〔固原文物：p.215〕

右：印泥におした状態をイメージ作成

⑥は、寧夏回族自治区、固原で1986年に発掘された唐の史訶耽(584～669)墓から発見された。史訶耽墓は1982年から1995年にかけて発掘された北朝末から唐前期の7名の史氏墓のひとつである。訶耽の父の史射勿(544～609)墓からは先述の石の部分の欠いた金の指輪がでていた〔羅1996, 固原文物 p.212〕。

この史氏は中央アジア、キッシュ出身のソグド人であることが知られており、被葬者は史索巖系と史射勿系の2系図に集約できることや北朝末から隋唐期のソグド人一族の政権への関わり方が明瞭にされつつある〔山下2004, ソグド人墓誌研究ゼミナール2004〕。本稿で特に重要なのはこの史氏が先にあげた原州李氏と同じく、原州平高の人だということである。さきに書いたように、永熙3(534)年、宇文泰に敵対する側について原州刺史の史帰は李穆の活躍でとらわれてしまう。史帰と史射勿系のつながりは不明だが、史帰の一族は史射勿系より前に原州・平

高に居住していたソグド人の可能性があるという〔山下 2004〕。またしばしば原州李氏一族に史射勿が従軍しており〔ソグド人墓誌研究ゼミナール 2004〕、史帰の件で原州李氏と史氏は敵対関係になったこともあったとはいえ、李氏と原州のソグド人の間にはきわめて密接な関係がみられる。先述したように原州は姑臧と西安の間に位置しており、439 年、北魏が北涼を滅ぼした際、姑臧のソグド人を多数捕虜にし、453～460 年くらいにソグドの王が「これを贖わんことを請」うて許された（『魏書』巻 102 西域伝・粟特国条）という記事などから、北涼滅亡前後から固原にソグド人居住地が形成されたか、大きくなったとみてよいだろう。贖うとは身分的扱いの改善を求めたのであり、帰国を意味しているわけではないし、北涼滅亡を事前に察して姑臧脱出をした者もいたにちがいないからである。

このようにみていくと⑤と⑥の指輪がともにソグド人史氏もしくは固原に聚落をつくっていたソグド人の手によってもたらされたのではないかと考えられる。ちなみに 1957 年、西安で発掘された隋の李静訓(599～608)墓からササン朝ペルシアのペローズ金貨や貴石印章を利用した首飾り(⑧)など西方系の副葬品が出土しているが、李静訓は李賢の曾孫であるので、やはり原州との関係が想起される<sup>9)</sup>。

⑧史訶耽墓宝石印章は銘文がはいっていることもあり先行研究が比較的多いがやはりササン朝の印章との比較はないようである〔羅 1996 : pp.240～247、斉 1999 : p.369、Juliano, & Lerner 2001 : p.260〕。獅子の上に三叉にわかれた植物があり、まわりにはパフレヴィイ文字が刻まれている。「世界寛容！世界寛容！世界寛容！」と書かれているという<sup>10)</sup>。羅豊はさまざまな西方系の獅子像をあげ、この印面の獅子像がササン朝のものに類似すること、そしていかにして獅子像が中国に伝わり中国化していったかを示し、獅子の上の植物を「生命樹」としてゾロアスター教との関係を示唆した〔羅 1996〕。しかし、ササン朝の印章と比較していくと容易には同意しがたい点がある。本稿末に付したササン朝の印章⑥のグループをみていただきたい。

獅子像は⑥ときわめて酷似しており、とりわけ⑥-b のルーブル博物館蔵のものは獅子上に植物があることまで同じである。⑥とササン朝の印章との関連性は確実であろう。ただ⑥の植物は⑥-d と同じ植物であって、⑥-b の植物は⑥-e の植物とみられる。この⑥、⑥-e の植物は、田辺勝美が指摘した 3 弁のチューリップとみられ、製作年代をおおよそ 4～6 世紀とできるようにおもわれる〔田辺 1999〕。なお、〔Juliano, & Lerner 2001 : p.260〕は獅子はゾロアスター教のナナー神であり、チューリップに似た植物はゾロアスター教の「tree of all fruits」とみている。実際、獅子はナナー神の乗り物となっていることが多く、バクトリアで前 1 世紀ないし後 1 世紀に発行されたとされるサバドビゼス王のドラクマ銀貨にはギリシ

ア文字でナナー女神の名を記して、神自身は記さずに眷属の獅子で表現しているという(⑥-f) [田辺 1996, 全集 : p.320]。このドラクマ銀貨にみえる三日月はナナー神の父(月神)を意味するとされ、ナナー神の頭部に三日月がついた図像の印章 [全集 : p.320] もある。そうすると獅子と三日月の組み合わせの⑥-a、⑥-c はナナー神を表現している。ただ、チューリップは正義と公正を司るアスタドという女神の花とされるとする説があるとされるので [田辺 2002b]、⑥はアスタドを示すのかもしれない。

このようにみていくと⑥にみられるような獅子の表現は [Juliano, & Lerner 2001 : p.260] が指摘したようにナナーかアスタドという神を示すとみられる。ちなみに⑥の印章は側面に傷跡がほとんどなく、実際印章として使用されていた可能性は低いという [Juliano, & Lerner 2001 : p.260]。ナナー神であれば特にソグディアナで良く描かれており [全集 : p.320]、ソグド人から信仰の対象とされていたことがうかがわれる。その意味で、この貴石印章は護符的な役割をはたしていたのかもしれない。

史訶耽の代にササン朝は滅亡し(651年)、西突厥が滅び(657年)、唐朝の勢力は西にのび、ユーラシア大陸全体の情勢は大きく変化した。唐朝による交通網の整備が商業活動に安定と周辺地域に大きな変化をもたらしたことはよく知られているとおりである。ただ、ソグド語の「古代書簡」から知られるように「河西地域を根拠地としたソグド商人らが、近隣地域での交易活動を維持しつつ、そこから遠く中国内地へ人をつかわしたり、又ソグディアナ本国と手紙で連絡を取りつつ、本国へ直接に現地で買い付けた物品を送付」 [荒川 1999] していたことを想起すると、荷主をあらかじめにする封泥や印章はこのような時代の前にも後にも不可欠な道具だったと思われる。本稿でとりあげた⑤⑥は副葬品であって装飾品としての側面が強いが、ササン朝系の印章が北朝隋唐期の漢人統治下の領域で続々と発見されていることは、当時、そうした印章を用いて西方にむけて商業活動を行う者がいた可能性を示している。印章はこうした点から、今後より注目されるべき資料であろう。

## おわりに

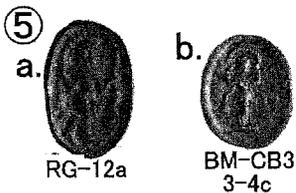
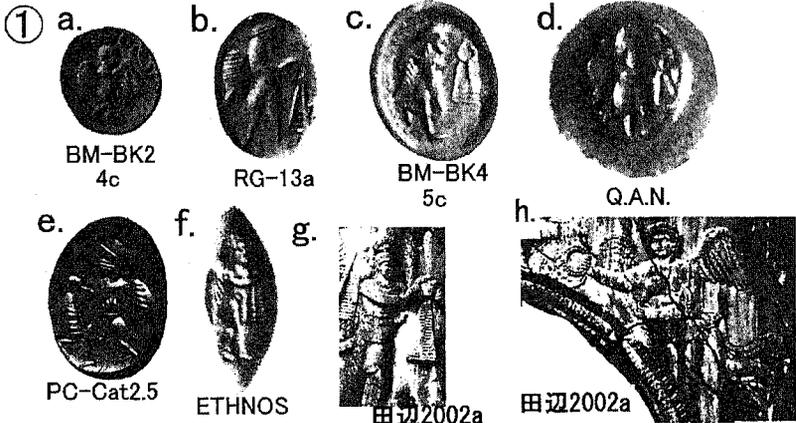
従来の中国国内出土の貴石印章の研究において、ササン朝ペルシアとの関係が指摘されることはあったが、ササン朝ペルシアの印章自体が参照されることはほとんどなく、十分な検討がされているとはいえなかった。本稿はササン朝の印章研究を援用することで北朝隋唐期にあらわれた貴石印章の分析を試みた。論じた

ことをまとめれば以下の通りである。

- 1) 中国国内から出土している貴石印章のうち、本稿でとりあげた巴楚人形押印・李賢墓金戒指・史訶耽墓宝石印章はササン朝系の印章である。ただ典型的な①をのぞき、ソグディアナなどで作られた可能性が高い。おそらく東西に商品を運んでいたとされるソグド人と関係があるとみられる。
- 2) 原州固原および西安で出土した北周～唐初の貴石印章、貴石首飾りは原州李氏とソグド人である原州史氏との関係から考えて、固原に居住していたソグド人と李氏との関係によってもたらされたものと推測される。
- 3) 貴石印章はユーラシアの各地域間の交渉をうかがわせる資料としての価値を持っている。

若干、検討が粗い感があるが、既発表の中国出土の貴石印章の意義について問題提起する役割は十分に果たせたと思われる。ここでは紙幅の関係もあり、多くの印章について分析を残したが、稿をあらためて論じるものとした。なお、不十分な点が目立ったとおもうが専門家のご意見、ご批判を乞う次第である。

図版



略称（出典—図版番号）  
 BM = [Bivar 1969]  
 RG = [Göbl 1973]  
 Q.A.N. = [Frye 1973]  
 ETHNOS = [Osten 1952]

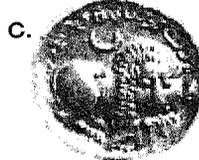
⑥



RG-43a



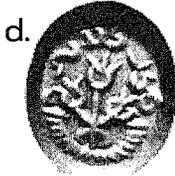
ML-4.59



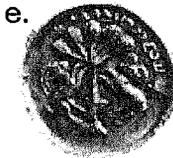
BM-DA5



全集:p320



MF-207



BM-ES1

PC = [Calleri 1997]

ML = [Gignoux 1978]

MF = [Frye 1971]

<注>

- (1) [夏竦 2000, 桑山 1982, 谷一 1997, 羅 2004 : pp.113~188]。
- (2) [榮 2001]などを参照。
- (3) [新関 1995 : pp.49~55]。
- (4) カロシュティエー文書については、[赤松 2001]に整理されている。
- (5) [黄 1958 : pp.59~61, 李 1962, 李 1980]。
- (6) [Frye, R. 1973 : L.377]は封泥だけの出土であるが、①の同類とみられる。
- (7) [趙超 1992 : pp.384, 482~484]。
- (8) [アリバウム・加藤訳 1980] アフラシヤブの壁面の説明で「指輪はしばしば上部に球がついている」(p.78)とあるが[全集 : pp.160~165]では確認できなかった。
- (9) [石渡 2003]はこのような豪華な埋葬品は李静訓が北周・隋政権の親族に近いためとする。
- (10) 山内和也によると「世界寛容！世界寛容！世界寛容！」と読めるという[羅 2004 : p.50]。[Juliano, & Lerner 2001]はほぼ同じ解釈で、林梅村に異説があるという。

略号

李希宗墓 = 石家荘地区革委会文化局文物発掘組「河北贊皇東魏李希宗墓」、『考

古』1977-6

呼和浩特 = 内蒙古文物工作队・内蒙古博物館「呼和浩特市附近出土の外国金銀幣」、『考古』1975-3

李賢夫婦墓 = 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館「寧夏固原北周李賢夫婦墓発掘簡報」、『文物』1985-11

楼蘭展 = 朝日新聞社『楼蘭王国と悠久の美女』展覧会図録、1992

ペルシア展 = 古代オリエント博物館『古代ペルシア展』展覧会図録、1998

古迹大観 = 新疆維吾爾自治区博物館等『新疆文物古迹大観』図録、1999

全集 = 田辺勝美・前田耕作編『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』小学館、1999

黄金の道 = 東京国立博物館等『シルクロード・絹と黄金の道』展覧会図録、2002

バクトリア = MIHO MUSEUM『古代バクトリア遺宝』展覧会図録、2002

固原文物 = 寧夏固原博物館『固原歴史文物』科学出版社、2004

Uzbekistan = *Культура и искусство древнего УЗБЕКИСТАНА*, Institute of Archaeology of the UzSSR, (Exhibition catalogue), 1991

## 引用文献

日本語、五十音順

赤松 明彦

2001 「楼蘭・ニヤ出土カロシュティー文書について」、『流沙出土の文字資料』、京都大学学術出版会。

荒川 正晴

1999 「ソグド人の移住聚落と東方交易活動」、『世界歴史』15、岩波書店。

アリバウム, L.I. 加藤九祚訳

1980 「古代サマルカンドの壁画」、文化出版局。

石渡 美江

2003 「李静訓墓出土首飾り」、『古代オリエント博物館紀要』XXIII。

桑山 正道

1982 「東方におけるササーン式銀貨の再検討」『東方学報』54。

小谷 仲男

1988 「死者の口に貨幣を含ませる習俗」『富山大学人文学部紀要』13。

スタイン, M.A. 松田壽男訳

2002 『コータンの廃墟』、中公文庫。

田辺 勝美

- 1996 「ソグド美術における東西文化交流」、『東洋文化研究所紀要』130。  
1999 「ヘラクレス神とチュールップ王冠」、『古代オリエント博物館紀要』XX。  
2002a 「王たちのモニュメント」、『季刊文化遺産』13。  
2002b 「王権の造形表現 ターケ・ボースタン大洞」、『季刊文化遺産』13。

谷一 尚

- 1997 「中国出土のビザンツ金貨」、『オリエント』40-2。

新関 欽哉

- 1995 『東西印章史』、東京堂出版。

マルシャーク, B.I.・穴沢 味光

- 1989 「北周李賢墓とその銀製水瓶について」、『古代文化』41-4。

山下 将司

- 2004 「新出土史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態—固原出土史氏墓誌を中心に—」、『唐代史研究』第7号。

吉田 豊

- 1997 「ソグド語資料からみたソグド人の活動」、『世界歴史』11、岩波書店  
ソグド人墓誌研究ゼミナール  
2004 「ソグド人漢文墓誌訳注(1)固原出土「史射勿墓誌」(大業六年)」、  
『史滴』26

中国語、ピンイン順

黄 文弼

- 1958 『塔里木盆地考古記』、科学出版社、pp.59～60。

李遇春

- 1962 「新疆ウイグル自治区文物考古工作概況」、『文物』1962-7,8

李遇春・賈應逸

- 1980 「新疆脱庫孜沙来遗址出土毛織品」、『中国考古学会第一次月会論文集』、  
文物出版社

羅 豊

- 1996 『固原南郊隋唐墓地』、文物出版社。  
2004 『胡漢之間—“絲綢之路”與西北歴史考古』、文物出版社。

斉 東方

- 1999 『唐代金銀器研究』

榮 新江

- 1991 「所謂 ‘Tumshuqese’ 文書中の ‘gyazdi-’」、『内陸アジア言語の研究』VII。
- 2001 「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」、『中古中国与外来文明』、三聯書店。
- 夏竦
- 2000 『夏竦文集 下卷』(中外關係史的考古研究及外国研究)、社会科学文献出版社。
- 趙 超
- 1992 『漢魏晉南北朝墓誌彙編』、天津古籍出版社。
- 張 平
- 2004 『龜茲—歷史文化探微』、新疆人民出版社 p.159
- 欧文、アルファベット順
- Bivar, A.D.H.
- 1969 *Catalogue of The Western Asiatic Seals in The British Museum Stamp Seals II The Sassanian Dynasty*, London.
- Callieri, P.
- 1997 *Seals and Sealings from The North-west of The Indian Subcontinent and Afganistan*, Naples.
- Frye, R.
- 1971 *Sasanian Seals in the Collection of Mohsen Foroughi, Corpus Inscriptionum Iranicarum Part III Pahlavi Inscriptions*, London.
- 1973 *Sasanian Remains from Qasr-i Abu Nasr*, Massachusetts.
- Göbl, R.
- 1973 *Der Sasanidische Siegelkanon*, Braunschweig.
- Gignoux, P.
- 1978 *Catalogue des Sceaux, Camees et bulles Sasanides de la Bibliotheque Nationale et du Musee du Louvre II. Les Sceaux et Bulles Inscriptions*, Paris.
- Juliano, Annette. L. & Lerner, Judith. A.
- 2001 *Monks and Merchants -Silkroad Treasures from Northwest China*, New York.
- Osten, H.H.V.D.
- 1952 *Geschnittene Steine aus Ost-Turkestan im Ethnographischen Museum zu Stockholm*, *Ethnos*, Vol. XVII.